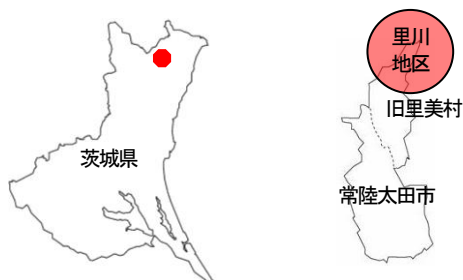


モデル事業名	協働による元気な里山づくり推進事業
活動団体名	里川町会
ホームページ	<a href="http://gazoo.com/g-blog/SATOMI_MURA007/index.aspx">http://gazoo.com/g-blog/SATOMI_MURA007/index.aspx</a>
所属/ 担当者名	里川町会長 荷見 誠
連絡先	0294-82-4001 (携帯 080-3476-4001)
活動地域	茨城県 常陸太田市 里川地区

### ● 活動地域の概要

- ・ 里川地区は、地区全体で45世帯、人口は140人（平成21年3月1日現在）。高齢化率は34%で、若年層の転出も多いため、今後、さらに高齢化が進むと考えられる。
- ・ 福島県境に接し、国道の通る平野部から約5km離れた山間地にある。常陸太田市の中心部からも車で約1時間かかる距離にある。
- ・ 公共交通機関は、常陸太田市の中心街にある常陸太田駅から、週に2回、2往復のみ市民バスが運行している。自家用車が必須であるため、車の運転ができない高齢者や障害者には不便な地域である。
- ・ 殆どの方が地区外に通勤しており、兼業で農業や林業を行っている。



【高齢化による耕作放棄地の増加】



【山の管理者が離れ荒れていく山々】

### ● 活動地域の課題

- ・ 平成17年から平成21年までの4年間に世帯数が2件減り、人口も24名減少している。地区のコミュニティ存続のためにも、これ以上の人口減少を食い止める必要があるが、里川地区内で多くの人が生計を立てられる産業は存在しないため、地区外への転出者も多い。また、人がいなくなることで、畑や水田が荒れ始めている。一度荒れてしまった畑や水田は、耕作できる状態、つまり、収入に繋がる状態に戻るまで、大変な苦労を要する。本格的な管理とまではいかなくとも、定期的に人手を投入できるような仕組みづくりが必要である。
- ・ さらに、昨年度の取組を通じて、地域外の住民を集めるツールが未だに確立していないことが課題として挙がっている。昨年度は町会からの呼びかけや市の広報、NPOによるメーリングリストの活用など、幅広い手段を用いて人を集めたが、里川地区に通うようになった固定の都市住民は片手で足りる数に過ぎない。今後、そのような人々を引き繋ぐとともに、より多くの里川ファンを増やすこと、里川地区の住民達とそのような都市住民との直接的なコネクションを築くことに加え、交流人口を拡大するため、地域の魅力のさらなる向上を図る必要がある。

### ● 活動の内容

- ・平成20年度
  - ・ 地域文化伝承部会、農地利活用部会、環境整備事業部会の3つの部会を組織し、それぞれの部会が中心となって活動を行った。
  - ・ 地域文化伝承部会は、主に集落住民の機運醸成・情報共有化を担い、「里川講」を開催し、地域の老人達から昔の生活の話を聞き、とりまとめるとともに、子どもの減少と同時に消失した小正月の祭りである「鳥追い」を復興した。
  - ・ 農地利活用部会は、都市、近隣住民との協働により、遊休農地を借用し、昔からの地域の特産である「里川カボチャ」を耕作し、カボチャの加工品等を試作しながらブランド化に向けた活動を行った。
  - ・ 環境整備事業部会は、集落環境維持活動の実施に努め、シンボルとしての桜山の整備、渓谷遊歩道の整備、林業教室の開催による間伐の調査、実施、林木素材の流通等について町会関係者、都市住民との交流に取り組んだ。
- ・平成21年度
  - ・ 前年に引き続き3部会を中心に取り組みを推進し、基本的な取り組みとして昨年度の事業を継続した。
  - ・ 今年度の新たな事業としては、地域文化伝承部会では、「にっぽんの里100選」に選ばれた同市水府地区持方集落との交流を図った。持方集落は里川地区よりも過疎で高齢化の進む地区であり、考え方などを学ぶとともに、互いの地区を行き来し、人の活性化を図った。復興した「鳥追い」について、規模を拡大し、実施した。
  - ・ 農地利活用部会では、「里川カボチャ」の品種の固定や特産品の開発など、付加価値を生み出し高価格で売するための方針等を組み立てた。
  - ・ 環境整備事業部会では、「結」組織を復活し、地域内全域の普請等に取り組みの幅を広げ、地域内のサイン（標識や看板）の整備等も行った。又3月には前年に引き続き桜苗の植栽も予定している。

## ● 活動の成果

### ● 平成20年度

- ・ 町会を主体とした活動についての機運が高まり、数十年途絶えていた鳥追い祭りの復活や、遊休農地の整備等の様々な事業を通して、里川町に元気が出てきた。
- ・ 本事業を契機として各部会が組織され、地域の課題や希望について話し合い、地域の再確認・再発見を通して、地域の人たちが自ら多様な主体と協働し、楽しみながら取り組むことが出来るようになってきた。
- ・ 里川講に関しては、お年寄りと若い世代との交流となるだけでなく、お年寄り同士が互いに行き来し、コミュニケーションをとる機会としても機能しており、コミュニティ活動が活発化した。また、里川講で話し合われた事柄については、地域の広報紙である「通信さとがわ」などに掲載して町会内での情報の共有を図ると共に、昔の祭りや忘れられた事柄などの再発見から、新たなイベントのきっかけ等につながった。
- ・ 遊歩道の整備や、桜の植樹などを通して地域の魅力が増したことは言うまでもなく、地域の住人からも、遊歩道近辺の景観の美しさについて初めて気がついた、といった感想があったり、自ら架けた橋や、苦勞して植えた桜などに誇りと愛着を持ち、これからも自らの住む地域を、より住みよく、より楽しくしていこうという気概が強まった。



鳥追いの様子



シンボルとなる桜の植樹

### ● 平成21年度

- ・ 地域文化伝承部会では、前年度に引き続き「里川講」を開催し、お年寄りから昔の暮らしについて聞き、伝統的な暮らしや考え方を聞き集めている。今後、これを取りまとめ製本し、地区内外の人への情報発信のツールとする。また、同市水府地区持方集落を訪ねると共に、持方集落の方々を「鳥追い」祭りに招待するなど、互いの地区を行き来するような関係を構築した。今年度で復活2期目の「鳥追い」祭りは、近隣地域から和太鼓演奏団体やよさこいソーラン団体等も招くなど、交流の幅を広げている。
- ・ 農地利活用部会では、引き続き遊休農地を利用して都市住民と共に「里川カボチャ」の耕作を行うと共に、品種の固定や特産品の開発など、付加価値をつけるための方針等を組み立て、地区内全住民の同意を図った。今後、地域を挙げて特産品である「里川カボチャ」のブランド化を図っていく。
- ・ 環境整備事業部会では、遊歩道の拡張整備や、桜・紅葉を追加で植樹した他、「結」組織を復活し、地域内全域の普請等に取り組みの幅を広げ、サイン（標識や看板）の整備等も行った。正月前の道路沿いの刈り払いを「結」の年中行事として決定するなど、活動幅の拡大と継続を図っている。



水府地区との交流会



カボチャようかんの試作

## ● 今後の課題及び展望

### ● 課題

- 様々なイベントを催しているが、それぞれの部会の活動において、参加する地域内の人も地域外の人、ある程度、固定化してきている。固定メンバー、固定ファンを増やすと言う点では良いが、より多くのファンをつくること、何より地域の活動の後継者達を育成していくと言う点では、より多くの人に関わってもらえる環境をつくる必要があると感じている。
- 特に、地域外の人との交流について、今後、充実を図る必要がある。今まで里川地域を訪れた人たちには、市やNPOの協力を得て情報を発信しているが、定期的な情報発信や何度も訪れたいような情報発信ができておらず、ファンが増加していない。地域ブログ等を活用し、効果的な情報発信方法・体制の構築を図っていく。

### ● 展望

- ・ 今後は、植樹した桜や、特産品のカボチャを有効活用し、桜の季節にコミュニティセンター等を休憩所として開放し、カボチャの加工品を販売するなどして、観光客の誘致や現金収入の増加を図っていきたい。
- ・ 地域内には、七反の桜と言う樹齢350年の大樹があり、その他にも新たに植えたシンボル桜、その他の桜や紅葉など、住民に愛着ある多くの樹木があるため、樹木の保全・育成を一層、図っていく。
- ・ 特産品の里川カボチャについては今年度地区内全体で方向付け、品種の統一化への合意形成を行ったため、来年度はより優良なカボチャを育て、まとまった数の出荷量の確保を行うとともに、特産品として地域内外の人々へのブランド化を図る。
- ・ 里川は小さな集落であるが、整備した川沿いの遊歩道を回ってもらうなど、訪れた人が地域内を一巡し、終日楽しめる環境をつくる。
- ・ 「里川講」等、人々が集まって「話し合う」場を積極的に儲け、地域内の人の活発化、後継者の育成を図っていく。また、水府地区持方集落との交流や、常陸太田市の市街地、近隣地域の居住者や学生等の交流も、定着を図る。
- ・ 定期的な情報発信や何度も訪れたいような情報発信を充実させ、地域外の里川ファンの確保に努める。